山陰中央新報　2022年（令和4年）3月30日（水曜日）

高校生の部
新聞記事感想文コンクール（応募数117編）

優秀賞　「島根だからこそあるもの」

島根県立吉賀高校3年　吉井　美咲さん

私は高校3年間を生まれ育った千葉県ではなく、島根県で過ごしている。だからこそ岩本悠さんの記事を読み、深く共感した。

私も千葉で暮らしていたときには、島根に対して、田舎で何かに挑戦できる機会が少ないという固定観念を持っていた。しかし、高校でしまね留学をし、吉賀高校に進学したことで、この固定観念はなくなった。

さらに、島根だからあるものも見つけた。こうした気づきは、高校での探求の時間からが大きい。そもそも探求の時間が授業の一環として存在していることが、島根だからこそのものだと思った。

また、探求を通して、人とのつながりを強く感じた。私は探求で、働く大人に密着した動画を作ったのだが、密着する人を地域の方につないでもらったり、地域の方に密着をさせてもらった。こうしたアットホームな地域連携はどこにでもあるものではないと思う。

加えて、こうした活動は私に、「知る」大切さを教えてくれた。今まで触れたことのない職種の方にお話を聞くことで、その方の仕事に対する思いを知り、私自身、良い意味でその職業を見る目が変わったり、日々の生活の中で意識するようになった。だからこそ、未知なものに対して固定観念で終わってしまうのは、もったいないと思っている。

島根での3年間は、人生において特別な経験の連続であった。だから私も、何かしらの形でも、島根に関われたらいいと思っている。そして、岩本さんのように、私も島根の良さを伝えていきたい。

未知の「良さ」探し伝える

吉井さんが読んだ記事

談論風発　672

島根県教育魅力化特命官／人づくり特命官
岩本　悠

令和の時代の島根観

いわもと・ゆう　東京生まれ。大学時代にアジア・アフリカを巡り『流学日記』を出版。ソニーを経て、2007年から隠岐島前の高校魅力化に従事。15年より島根県の教育魅力化に携わる。

2021年10月24日掲載「談論風発『令和の時代の島根観』」

ないことはない

高校卒業後に県外へ進学した若者と話をしていると、島根に対していくつかの固定観念が刷り込まれているように感じる。

その一つが「仕事がない」というものだ。島根の有効求人倍率は全国平均を超え、仕事・求人はあるが人手の方が足りていない現状だ。安定しているといわれる公務員も、年配者の大量定年退職が続く時代において、県庁一つとっても毎年100人以上の採用が続くことが予想される。また、複数の仕事を組み合わせて働くマルチワーク（複業）などの新たな働き方やその受け皿づくりも全国に先駆けて進んでいる。仕事がないことはない。

また、島根に帰ると「成長できない」というイメージもまだあるようだ。「若いうちは都会で力をつけて…」と、チャレンジ精神や成長意欲が高い学生ほどよく言う。「都会の方が成長できる」「島根では成長できない」というのは本当なのだろうか。

一般的には、地方の中小企業は都会の大企業より研修や人材育成の制度・仕組みは整っておらず、人への投資額も少ないかもしれない。会社の中だけを見ればそうかもしれないが、社外にも目を向ければ豊富な挑戦機会と成長機会が島根にはある。自分から動けばさまざまなチャンスや舞台、応援してくれる人たちと出会える。

また、昔は最新の知識や情報は都会に集まっていると思われたが、今やインターネットにより島根にいても世界中の最先端の知識や情報、人ともつながれる。実際に私自身も、隠岐で働きながらオンラインを活用してアメリカの大学院で学び修士号を取得し、博士課程にも通っていた。成長機会はある、自分次第でいくらでもつくれる。

一方、島根に帰ったらもう外に出られない」という不安もあるようだ。一度Uターンしてしまうと、死ぬまで、骨を埋めるまで外に出られないかのようなイメージ。島根に戻れば土地に縛られ自分の一生が固定化されてしまうと感じるのは、帰るのは怖くなるし、もうしばらく自由でいたいと思うのだろう。

終身雇用制が崩れ、リモートワークが進み、人の流動性が高まる時代。私が代表をさせていただいている小さな財団も、本拠は島根だが、他県に事務所を持ち、メンバーの多くは県外にいて、今国や海外での事業を進めている。

島根を人生の終着点や行き止まりと考えるのではなく、人生の起点や拠点と捉えても良いだろう。島根から全国や世界に挑戦できるし、出たいときは出れば良い。何度出ても、何度帰ってきても良い。土地は人を縛らないし、縛れない。囚われているのは私たち大人の意識の方かもしれない。島根に外への越境や往還の機会は今でもあるし、これからもっと創りやすくなる。

島根に商業主義的なモノは少ないかもしれないし、今後もあまり増えないかもしれない。ただ、人が幸せに生きるために必要なコトはたいていある。自分らしい幸せな働き方、暮らし方、生き方はここでつくれる。そのことに気付いていれば、たとえ人口の総数が減っても、一人一人の幸せが減ることはない。そんなことを次代の若者や子どもたちに伝えていきたいし、伝えていただきたい。